

FASID 第 231 回 BBL セミナー報告（記録要旨）

テーマ：ロヒンギャ迫害とミャンマー最大の国際的危機～日本に何ができるか～

日 時：2018 年 10 月 24 日（水）12 時 30 分～14 時 00 分

場 所：FASID セミナールーム

講 師：Maung Zarni 氏 カンボジア虐殺文書センター（DC-Cam）フェロー/
欧州過激主義研究センター（EuroCSE）諮問委員

ファシリテーター：村主道美氏：学習院大学教授

出席者：コンサルタント、民間企業、NGO/NPO、個人より合計 27 名（内賛助会員 1 名）

1. 発表要旨（配布資料参照）

1-1. ロヒンギャの迫害について

- 「ロヒンギャ」という言葉は 1964 年にビルマ政府が発刊した百科事典の第 9 巻に掲載され、我が国の少数民族のひとつとして紹介されているにも拘らず、現ミャンマー政府は「ロヒンギャという民族はいない」と声明を出し、ロヒンギャという言葉の代わりに「ラカイン地方に住むイスラム教徒」という言葉を使用し、ロヒンギャの存在をなかったことにしようとしている。
- 「ロヒンギャはバングラデシュからの移民でありミャンマーの仏教を侵略しようとしているイスラム教徒である」という嘘の噂が流されている。
- ロヒンギャの人々は、他のミャンマー国民と比較して、医療サービスへのアクセスが悪く、5 歳未満死亡率も高い。ロヒンギャの人々だけが、隣村にある診療所を受診するために、3～4 ヶ所に及ぶ軍のチェックポイントを通過しなければならない。また、婚姻を結ぶ際に非常に厳しい婚姻証明の申請手続きを行う必要があり、3 人以上の子どもを持つことを禁止されている。
- ロヒンギャの人々には教育の機会も与えられず、成人の 80%は読み書きができない。これは、植民地時代に欧米人が奴隷に教育を行わなかったのと同じで、教育により知恵をつけられ、反乱を起こされることを恐れてのことである。

1-2. Slow Burning Genocide とは？

- 単なる暴力や残虐行為ではなく、時間をかけて組織的・段階的に行われる政府による集団根絶である。

1-3. 日本は移民問題に対して何ができるか？

- ミャンマー人の中には、かつて日本に支配された過去についてよく思っていない人もいたが、戦後の日本の復興は、ほぼ全てのミャンマー人の憧れであり続けている。ミヤ

ンマーはこれまで日本から数多くの支援を受けているが、金銭的な援助以上に彼らは日本の政治的なリーダーシップを求めている。日本政府にはもっと積極的にロヒンギャ問題に発言してほしい。

- ロヒンギャの迫害を止めるためにはミャンマーの軍制が再構築される必要がある。さらに、民主化を進めることが非常に重要である。民主化により国民の社会や政治へ参加が推進され、ジャーナリスト等も自由に報道を行うことができるようになる。
- 日本大使が以下のような発言をしたことがある。「ミャンマーでは民主化が達成しつつある。アウンサンスーチーは民主化の希望であり、私たちは彼女に対するサポートを惜しまない。」日本政府がこのような公式見解を発表してしまうと、一般の人々がロヒンギャの迫害についていくら声を上げようと無意味になってしまう。私は日本の友人たちに言いたいことは、具体的根拠に基づいて、国のリーダーや組織のトップに疑問を呈することができるようになってもらいたいということだ。

2. 質疑応答

Q1: Maung Zarni 氏のお話の中に、ロヒンギャの人々には出生証明書や死亡証明書が発行されないということがあったが、それらの証明は個人を保護するという点では非常に重要であると考えます。したがって、ミャンマー政府はまずロヒンギャの人々にこのような ID を交付するべきであると考えますが、このようなアプローチは機能するだろうか、また現時点でのアプローチとして適切だろうか？

Q2: かつて大虐殺が起こったルワンダや旧ユーゴスラビアにおいては、その後の過程で「民族」を否定する動きが見られた。ご指摘のあった、ロヒンギャの人々に対する ID カードの発行は、問題を解決する第一歩だと考えうるだろうか？

Q3: 1982 年に制定されたミャンマーの国籍法（Citizenship law）において、多くの少数民族が認められている一方、ロヒンギャが民族として記載されていないとお話だった。なぜロヒンギャは認められないのだろうか？

Q4: すべてのミャンマー国民は聡明で理知的であるように思えるが、ロヒンギャに対する差別意識については洗脳のように植えつけられている。このような国民の意識を変えていくにはどのような手段があると思うか？

Q5: アウンサンスーチー氏と協力しミャンマーを民主化させていくために、日本政府はどのような手段をとるべきか？

A（上記 5 つの質問に対する返答）：

- （以下、ID カードの質問に関連し）ミャンマーではすべての国民が住民登録をする必要があり、移住してきた労働者も同様である。住民登録（公的文書）は国家が公共財を提供するために必要なものであると同時に、人々を差別するツールにもなり得る。
- ロヒンギャの人々にとって、公的文書は非常に重要なものである。私は、難民キャンプ

で彼らとその文書を水のボトルに入れて隠し持っているのを見た。他方で、ミャンマー政府は彼らから文書を取り上げることが可能である。例えば、入国管理局で、職員が ID を見せるように要求し、ロヒンギャの人々がそれを手渡したとする。すると職員はそれを取り上げ、彼らを叩きだす。すると彼らは帰属する国家を持たない人々となってしまう。これは、現実には起こっていることである。

- (民族の捉え方について) ルワンダの、ツチ(Tuti)、フツ(Hutu)は混血が進んだ場合もあり、人々がどの民族か区別することは困難であると理解している。同様に日本の沖縄にいる人々の誰が琉球民族か特定することは難しいであろう。ロヒンギャの人々にもヒンドゥー教徒の集団がある。こういった例は、民族を特定することの難しさ、問題の複雑さを表しているといえる。
- (国民の意識を変えるという点について) 自分は難しいと考える。その根拠の一つとして、2013 年から 2016 年にかけて、カンボジアとタイで 120 人のミャンマー人に対し **Genocide Sensitivity Training** を実施した。その結果、ロヒンギャ支援への意思を表明したのは 10 名以下にとどまった。
- (ミャンマーの民主化に関連し) 一つ申し上げておきたいのは、ミャンマー国軍は、ミャンマー政治の中心から 1 ミリたりとも動きはしないということである。2007 年にミャンマーの僧侶たちは、独裁に反対し声を挙げたが、今日、彼らはミャンマー国軍とともに立ち上がるという立場である。なぜなら、ビルマ国軍が仏教徒を庇護すると考えているからである。

Q6: 2015 年以降、アウンサンスーチー氏の人気は非常に高い。彼女は現在、法律や制度を制定する立場に無いけれども、彼女はなぜそれを容認したのだろうか。

A:

- 2008 年に改正されたミャンマー憲法では、国軍はいつでも政治に介入可能であると示されている。また、憲法改正に当たっては、議員の 75% が出席し投票する必要がある (議席総数の 25% は国軍司令官の指名による)。これは殆ど不可能なことであり、2012 年の選挙¹以前からアウンサンスーチー氏は憲法を改正し自身が法制度を制定する立場となることは出来ないと分かっていた。
- アウンサンスーチー氏は、ビルマ独立運動家で「建国の父」と国民から慕われるアウンサン將軍の娘であり、国軍司令官は彼女にとって兄弟のようなものだ。その証拠に彼女は繰り返し国軍を容認する発言を行っている。彼女は 25 年間の軟禁生活を経て、現在の職務に就いており、軍と共存することを選択したのだ。

3. 参考資料

- Newsweek, 「ミャンマー軍家系で仏教徒の私がロヒンギャのために戦う理由」, 2018 年

¹ ミャンマー連邦議会補欠選挙。アウンサンスーチー氏が立候補し、国会議員に当選。

- 10月27日 https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2018/10/post-11185_1.php
- Japan Times, 「Activist for Rohingya Muslims calls Tokyo to speak out over refugee crisis: activist」, 2018年10月25日, <https://www.japantimes.co.jp/news/2018/10/25/national/activist-rohingya-muslims-calls-tokyo-speak-refugee-crisis/#.W9fwMdf7TIU>
 - 日本経済新聞電子版「ロヒンギャ問題で板挟みのスー・チャー氏」2016年12月19日

別紙1：発表資料

以上